

アメリカの黒人英語

— ブルースからのアプローチ —

神 崎 浩

はじめに

アメリカにおける黒人文学についての研究は、この10年ほどの間に大変な進展をとげている。これはアメリカにおいてだけでなく、わが国においても同様のことが云える。

今、手元にある早川書房刊行の黒人文学全集別巻、「黒人文学研究」によると、日本で初めて黒人文学が翻訳紹介されたのは、1930年、新潮社のアメリカ尖端文学叢書の中の一冊で、「〔附〕黒人文学集」という形であったということである。それ以来、早川書房が全12巻、別巻1の「黒人文学全集」を出すまでの30年間に、わずか15冊の翻訳がされただけであった。

それが、1963年、リンカーンが奴隷解放宣言を発して、100年目に当る年以降、日本での黒人研究が急激に盛んになり、黒人の歴史、人種問題を含んだ社会問題、文学、さらに音楽、演劇などを含むエンターテイメントに関するもの等々、それこそ数え上げてタイトルを並べるだけでも、与えられた紙面では到底書きつくすことのできないほどの翻訳書及び研究書が出版されるようになったのである。

文学の研究だけに焦点を絞って見ても、文学史、作品論、作家論など各分野に渡っての研究が進んでいることは、黒人文学に興味を持つ者の一人として大変うれしいことであるし、また、今後の自分自身の研究意欲を大いに刺激され、新しい角度から黒人文学に取り組んでやろうという決意を新たにするという点においても、大変参考になることは云うまでもないこ

とである。

ところで文学研究という課題から考えれば、黒人文学に関しても、純粋にその芸術性について検討し、研究されるべきもののはずなのだが、こと黒人文学となると、どうしても、奴隷という特種な形でアメリカに移住した黒人たちの歴史を無視して、作品を論じ、作家を論ずることはできないし、また、できたとしてもそれはあまり意味のないことだと云えるだろう。

Langston Hughes は、黒人の生活を白人たちに見せ、黒人が白人とはこんなにも異なった生活感情を持っているのだ、ということを出すことによって読者をつかんだ作家であった。Richard Wright は黒人であるがゆえに苦しまなければならなかった数々の苦悩を、抗議の文学で世間に訴えた。James Baldwin は人種差別を抗議することは、差別を認めることになるとして、抗議に対する抗議の文学という旗じるしのもとに作家として出発している。

以上のような各作家の創作態度から考えても、アメリカの黒人作家が、「黒人」という但し書きが付いた作家として、過去の歴史を双肩に担った作品を書き続けることは当然のことであるし、また、それを批評する側としても、そのことを十分認識した上で、作品論なり作家論を展開しなければならないことは云うまでもない。

ところが、見方をひとつ変えると、アメリカの黒人作家の作品の方が、白人作家の作品よりも、本質的にはよりアメリカ的であると云えるのである。つまり、黒人たちがアメリカに渡って来た時、彼らは自分たちの自由意志に基づいて渡来したのではない。いい変えるなら、黒人は自由意志でアメリカにやって来なかった唯一の移民なのである。奴隷として、種族の絆や家族の絆を完全に断ち切られ、アフリカ文明の名残りを徹底的に奪われてアメリカに来たのだった。その結果、彼らは主人の言葉が話せないだけでなく、仲間同士であってもコミュニケーションにこと欠く状態で、孤

立していた。

だが、アメリカの白人たちはヨーロッパの伝統をそのままアメリカに持ち込み、文化的連続性を持って生活を始めた。一方、黒人は個人間の、また文化面での連続性を急激に残酷に断たれることによって、彼らの生活の基盤として頼れるものは、アメリカの状況だけとなってしまった。だからこうして、アメリカ的な状況を身につけた黒人たちが、ヨーロッパ文明の伝統の延長線上にある白人作家の作品より、本質的に、よりアメリカ性を持った作品を創り出すことは当然と云えるかも知れないのだ。

黒人文化と言語

アメリカ的状況において黒人たちが現在まで生存できたのは、主として、新しい国であるアメリカで身につけた価値体系を中心として、自分自身の心理を再構成したからであった。黒人は自身の威厳を維持することを可能にすると同時に、白人文明を脅かし崩壊することのない、独自の文化を形成したのである。その黒人文化が白人に向けて示される時、白人は黒人に対して少なくとも二種類の「類型化された黒人」のイメージを持つのである。そのイメージは、一方は動物のようによく働き、卑屈で、無邪気で愚直、忠実で辛抱強い面が強調され、もう一方では、動物のように並はずれた性欲を持ち、暴力的で破壊行為にはしりやすく、常に酒に酔い、無責任であるといった面に焦点が当てられている。

この二つのイメージは、偏見を持った白人にとっては、有益で便利である。それは白人が見た黒人のどんな行動も、この二つのイメージを組み合わせ、あらかじめ分類してある性質にあてはめれば、容易に理由が見つかるからである。従って、忠実だが無責任、辛抱強いが怠惰、という矛盾したイメージを利用して、黒人を否定的に分類してしまっているのである。黒人は、白人から期待されている役割を悟り、それを現実に演じることを余儀なくされてきたのだ。

だが、黒人文化が黒人社会内部に向けられた時、その内部においては、まったく別の状況が支配しているのである。つまり、動作、身振り、会話のリズム、言葉のイメージ等々、これらは全て白人の世界から切りはなされたさまざまな意味のニュアンスを伝えている。黒人のユーモア、黒人の歌や踊り、黒人の物語や寓話などは全て、黒人が陽のあたる場所を求めて、アメリカを放浪している間に、先祖から子孫へと受けつがれたものなのだ。

白人はこのような、外部と内部に向う二種類の黒人文化が実在していることを、漠然とであるが感じていて、口には出さないが、かなり理解しているのである。黒人文化が持つ活力は、アメリカの社会に魅惑と恐怖というモチーフを与えたが、これがアメリカの芸術活動の基盤になっている。こうして、白人は黒人の歌と踊りを理解し模倣したが、あまりにも泥臭くて多くの白人には模倣できそうにない音楽表現も存在していたのである。それがブルースなのだ。

この白人に理解できない生活と、それに伴った、同じく理解できない言語も、白人が作った黒人の類型の要素であり、これまではあまり検討されたことはないが、黒人文化を知るための重要な一面であると云える。しかし、黒人の類型を構成している大部分の要素と同様に、この要素にもある程度の真実はあるが、それは黒人固有の文化的特徴によるものではなさそうである。それより、これは黒人と白人の生活が分離していることを示す特徴の一つであり、黒人にとって、便利だったから利用され、発達したものだと言えようである。

黒人英語の記録

アメリカという新世界に連れて来られたアフリカ人が、どのようにして彼等にとっての新しい言葉である英語を覚え、その英語はどのようなものであったかは興味ある問題である。この黒人英語が言語学的な興味の対象

として集録されるようになったのは、奴隷がアメリカに連れてこられてから、200年も経過した19世紀に入ってからのものであった。だが、初期の黒人奴隷が話した英語に関する記録は、17世紀の後期から18世紀の初期にかけて、奴隷のいる南部の農園を訪れた旅行者の記録や、奴隷所有者たちが書いたメモ、さらには、奴隷自身の書いたものもあるので、それらのものから、奴隷たちが実際に話していたであろう英語をうかがい知ることはできる。

この初期の黒人英語の特徴は、多くの黒人たちが英語を覚えた主な理由が、白人と話すためではなく、黒人同士で意志を通じ合わせるためだったらしいというところから、白人が話している英語そのものを真似る必要がなかったことである。彼等がアフリカにいた時、英語を母国語として話していた者はいなかった。しかし、彼等が奴隷として、アメリカに連れてこられた時、日常生活を送るためには、奴隷同士何んらかの方法で連絡を取り合わなければならなかったはずである。彼等はアフリカの数多くある言語のうちの一種類づつをそれぞれが母国語として話していた。だが、その言葉は各民族の共通語ではない。そこで一番身近かな共通語である英語を、何んとかし自て分の意志を伝達するための手段として、手っ取り早い方法で覚えたのであった。

だから、この場合の彼等の話す英語は、丁度、幼児の英語、または、外国人の話す英語に似ているのである。

例えば、三人称単数現在の時、動詞にSが付かない。

John *run*. (Black English)

John *runs*. (Standard English)

過去時制の時、動詞は原型のまま、助動詞、または副詞で時制を示す。

He *done go*. (助動詞)

He *go yesterday*. (副詞)

代名詞は主格も目的格も同じになることが多い。

Me hungry. (Black English)

I am hungry. (Standard English)

その他，複数の S が付かない。

a whole lotta song. (songs)

so many million dollar. (dollars)

などである。

South Carolina と Georgia の Sealslands で使われている黒人英語は Gullah と呼ばれる方言であるが，その地域が隔絶した場所であるために，彼等の言語はほとんど変化しないまま今日まで来ている。その Gullah 方言は色々な形式で記録されているが，それによって初期の黒人英語がどのようなものであったかを判断することは可能である。

南部人 Charles C. Jones, Jr. は1830年代に生れ，農園で幼年時代を過ごし，その時，黒人奴隷から Gullah 方言を教えられた。そして中年になってから，この地方の民話を集めて，1888年に Boston で *Negro Myths from the Georgia Coast* と題して発行した。

その中にある “Buh Lion an’ Buh Goat” は次のような書き出しで始まっている。

Buh Lion bin a hunt, and eh spy Buh Goat leddown topper er big rock wuk eh mout an der chaw. Eh creep up fuh ketch um. Wen eh git close ter um eh notus um good. Buh Goat keep on chaw. Buh Lion try fnh fine out wuh Buh Goat duh eat

普通の英語では次のようになる。

Brother Lion was hunting and he spotted Brother Goat lying down on a big rock, chewing with his mouth. He crept up to catch him, When he got close to him he looked him over carefully.

Brother Goat kept on chewing. Brother Lion tried to find out what Brother Goat was eating.

このような方言では、表面的には現在使われている黒人英語とは大部違った感じがするのはたしかなことだが、それでもよく観察するとかなりの関連性に気がつくのである。

まず、時制に関するものだが、

Buh Lion *bin* a hunt, and eh *spy* Buh Goat のように物語の始まりの所を過去にして、その後は必要が生じるまでは、動詞は現在時制のままである。これは現在の黒人英語で、

We *was* sittin' down and we eatin'.

という具合に云うのとは *bin* が *was* に代っているだけが違っているだけで、語法的にはまったく同じである。また、

The boy *carried* the dog dish to the house and *put* some dog food in it and *put* some water in and *bring* it out and *called* his dog

という文にも Gullah 方言との時制の不一致という共通性を見出すことができる。

次に、

Me duh chaw dis rock. *Me* guine eat you.

のように、主語に *me* が使われている点で、初期の奴隷英語から、現在の黒人英語まで一貫したものがあることに気がつく。

この主語に目的格が用いられる語法は、地域的にはまったく差が無いと考えてよい。

“ *him* kep a seat side himself, sa.”

は Charles Dickens が1844年に *Martin Chuzzlewit* に書いている New York の黒人の言語であるし、Eudora Welty が1953年に書いた *The*

Ponder Heart には *Mississippi* が舞台となっていて、

Her didn't have nothing to give me.

が見出される。さらに、民話研究家の B. A. Botkin の集めた黒人民話集 *Lay My Burden Down* は、各地の黒人たちから直接に民話を収録したものなのだが、その中には数多くの用例が見られる

Him eat and get so full him can't hardly swallow.

Him try to carry on with free labor, 'bout like him did in slavery.

..... him say nothing

Us ain't been far off from there since us first landed in this country.

黒人英語の特徴

このような黒人英語に不慣れな人たちは、黒人の言語を文法的でないといふ非難し、白人の話し方が正しいという見方をする。そして、文法的にきちんとした構造を持った言語を用いられないのは、黒人が幼稚で知恵が欠けている証拠である、だから、彼等の英語は程度の低いものだ、とまで云うのである。

だが、一見文法を無視したでたらめのような黒人英語にも文法はあるのだ。言語学者には黒人英語の文法書も書けるし、辞書も作れるのだ。黒人たちは、白人的な標準英語とは違った言語構造を持った別な言語を使っていると考えれば、黒人英語を不用意にも知的水準の低さから来るものとして非難することが、間違いであることに気付くはずである。

そこで、黒人英語の文法を少しここで整理してみることにしよう。

1. 黒人英語においては、動詞の語形変化を最少限にとどめておく。つまり、三人称単数現在の時にも動詞の語尾に S を付けない。

I go, we go, he go となる。

さらに *be* 動詞は、主語が何であろうとも、*be* を用いる。

I be, you be, he be

これらの用語は、動作よりも人物を主体として考えるという点から見れば、標準英語よりロジカルな用法だと云える。

2. 動詞の否定は ain' (ain't), don' (don't) によってなされる。

He go. → He *ain* go. or He *don'* go.

ところがこの ain' と don' とは明らかに違った意味を持っている。

He ain' go. → He ain' *goin'*.

He don' go. → He don' *be goin'*.

この場合、He ain' go. は比較的短時間の否定を表わし、He don' go. は標準英語の否定と同じ意味を持つ、そして He ain' go. の進行形は He ain' *goin'*. となって、やはり比較的短時間の否定を表わす。それに対して、He don' go. の進行形は He don' *be goin'*. であり、He don' *goin'*. とはならない。その意味するところは、He ain' *goin'*. より期間的に長いものを否定するのである。だから、

He ain' *goin'* nowhere *right now*.

He don' *be goin'* nowhere *every night*.

となって、

He ain' *goin'* nowhere *every night*.

He don' *be goin'* nowhere *right now*.

とは云えない。

3. 進行形の場合、be 動詞を伴ったものと、be 動詞を伴わないものがあるが、それぞれ違った意味を含んでいる。

He *workin'*. (いま働らいている)

He *be workin'*. (ずっと働らいている)

be を伴わない方は現在の状態を表わし、be を伴ったものは長期間を表わす。

He *worhin'* when de boss come in.

は親方が来た時は働らいている、という意味であって、親方が来る前は仕事をしていなかったのである。それに対して、

He *be workin'* when de boss come in.

は親方が来る前からずっと仕事を続けているし、その後も続けるであろう、ということを表わす。

それでは、次のような文はどういう意味だろうか、

Yon *makin'* sense, but you don't *be makin'* sense.

これは、君はなかなか良い意見をだしたが、こんなことはめったに無いことだ、という意味なのである。

4. 完了形は *been* か *done* を用いて表わす。標準英語では *have* + 過去分詞で経験や完了を表わすが、黒人英語では *been* を用いた場合は経験を表わすことが多く、*done* を用いた時は完了を意味することが多い。だがこれは必ずしも限定されたものではない。

He *been* go.

He *done* go.

つまり、*been* は時間的にずっと前からの継続を表わし、*done* は少し前に起ったことを表わすこともある。

I *been* knowin' him a long time.

I know what you *done* done.

さらに、*been*, *done* 以外に *have* の代りに *is* を使うこともある。

Have you seen him? → *Is* you see him?

Have they gone there? → *Is* they gone there?

5. 否定文の場合、動詞を否定するだけでなく、その後続く名詞も否定する。そのために二重、三重の否定となるが、意味は当然単純否定である。

I *ain'* go nowhere.

You *ain'* gone bother me *noway no* more.

以上は黒人英語が標準英語と大きく異なっている部分のほんの基本的な一部を取り上げたに過ぎないのだが、これだけでも一見無秩序に見える黒人英語にもそれなりの文法があると云うことが理解できることと思う。

ブルースの中の黒人英語

黒人英語を文字に記録したものは、先に述べた Jones や Botkin 以外にも数多くある。だが、その記述の方法に統一を欠くところからなかなか本当の黒人英語の音声面での特徴をとらえることは困難なものとなっている。そこで、ここでは音声と表記が比較できるものとして、レコードに録音されている黒人の民族音楽として知られているブルースの歌詞の中から、いくつかを選んで、黒人英語の特徴を調べてみたい。

ブルースは19世紀の終り頃から、現在知られているような形式のものとなったようである。つまり、三行の詩であり、最初の二行は同じものを繰り返す、そして最後の三行目が前の行と韻をふんでいて、この三行詩の結論となるような警句的な行となっている。この最後の行は多くの場合、前の二行とはガラリと気分を変え、現実からの逃避のような態度を示すのだが、そうすることによって現在の生活の苦しさ、人生の厳しさを少しでもやわらげようとする効果があるようだ。

My gal's got legs, yes, legs like a kangaroo.

My gal's got legs, legs like a kangaroo.

If you don't watch out she'll hop all over you.

このように一行目と二行目がほとんど同型で繰り返され、三行目で結び、行の最後の韻がカンガルー [u:] とユー [u:] でそろうのが、ブルースの原則である。もちろんこれはあくまでも原則であって変型もまた多い。

Been to de gipsy to get ma fortune tole.

I been to de gipsy to get ma fortune tole.

Gipsy done tole me, damn yo' unhardlucky soal.

ここでは *I have been to the gipsy*～ かまたは、*I went to the gipsy*～ と云うところを、このような *been* で代用している。ついでながら、冠詞の *the* はほとんどの場合 *de* として書かれ、指示代名詞の *this, that* は *dis, dat* となるのが普通である。そして *ma* は *my* であり、*tole* は *told* であることは云うまでもないことだが、*tole* とすることによって、三行目の最後の *soul* と韻をふむことになるのだから、このへんはなかなか巧妙な技巧を感じさせられる。*Gipsy done tole me*, は *Gipsy had told me*, である。

Oh, I *ain't* goan move *no mo'* (repeat twice).

My house fell down, *ain't* got *no place* to go.

ここでは一行目にも三行目にも二重否定が使われている。これも黒人英語の特徴で *I'm not going to move any more*, であり、*I don't have any place to go*. となる。

I'm got a mind to ramble, a mind fo' to leave dis town, (repeat twice)

Got a mind my baby is goin' to turn me down

be 動詞が *have* の代りに用いられた例である。当然ここは *I've got*～ となるはずである。

De train's at de station, I heard de whistle *blow* (repcat twice)

Done bought my ticket but I don't know where I'll go

時制の不一致の例である。*I heard that the whistle blew*. となるところが *blow* のままである。三行目の *Done bought*～ は *Have bought*～ であって現在完了だから、以下は現在のままで良い。

There's nineteen *men livin'* in my neighborhood (repeat twice)

Eighteen of them *is dumb* an' the other *ain't no doggone good*.

主語と動詞の数の不一致が一行目三行目の両方にある。*There're nineteen men*～, *Eighteen of them are dumb*～. である。

むすびとして

ブルースは黒人英語の宝庫である。黒人英語だけではない、黒人の生活感情の宝庫でもあるのだ。

初期のブルースは南北戦争の時の奴隷解放がきっかけとなり、黒人の生活に大きな変化が起った時、それまで彼等の間で歌われていた work song や spirituals のようなものが、基礎となって変化し、それにつれて発生したと考えられている。そのブルースに歌われる内容は常に歌い手自身の個人的な生活体験であり、生活感情なのである。

だから、ブルースはその発生当時から現在にいたるまで、どの時代にも、その時代の黒人の世界観を反映していると考えて良い。黒人たちの間にインテリと呼ばれる中産階級が出現し、白人と平等の権利を持ったアメリカ人となるための様々な努力をし、次第にその目的に近づけば、彼等の歌うブルースに表われる内容も変化するのは当然のことである。そして、内容が変化すれば、それを表現するための言語にも変化が生じる。白人たちの生活水準に近づけば表現形式も白人的となるのだ。換言すれば、ブルースの変化は黒人自身のアメリカにおける進展の方向と一致すると云えるのである。

ブルースの三行詩という形式は残っても、その歌詞の中に黒人英語の特徴を見出すことのできなくなる日もそう遠くはあるまい。

参考文献

- Botkin, B. A.: *Lay My Burden Down*. The Univ. of Chicago Press, Chicag, 1945.
- Charters, Samuel: *The Legacy of the Blues*, Calder & Boyars, London, 1975.
- Dillard, J. L. : *Black English* Random House, New York, 1973.
- Hughes, L. & Bontemps, A. (ed.): *The Book of Negro Folklore*. Dodd & Mead, New York, 1958.

橋本福夫篇 黒人文学研究 早川書房 1963.